

# ◎旧朝香宮邸の歴史を訪ねて

連載◆第8回/白金今昔(その2)

## Residence of Prince Asaka 1933—



図1

インテリア・ストリートと呼ばれて人気のある目黒通りは、近世には相模街道として江戸と相模国を結ぶ重要な交通路でした。しかし当時江戸の外縁部であった白金台周辺は、田畑の中に大名屋敷や寺社が点在する森閑とした光景が広がり、鬱蒼とした樹間に狼が棲み、夕暮れ時には追剥ぎが出没する、寂しい場所であったといえます。

現在の庭園美術館と自然教育園一带は、近世初期には増上寺の管轄下に置かれていましたが、寛文4年(1664)に至って讃岐高松藩松平家の当主、松平頼重が下屋敷地\*として拝領しました。頼重は御三家のひとつ水戸徳川家の初代頼房の長子でしたが、まだ嫡子のなかった尾張・紀伊両家への父の遠慮によって、水戸家を相続することができませんでした。後に両家に嫡子が誕生すると、頼房は頼重の弟である光圀(後の水戸黄門)に家督を相続させたので、このことを哀れんだ將軍家光(頼重の従兄)の配慮により、頼重は水戸家連枝(分家)として常陸下館5万石を経て、寛永19年(1642)新たに讃岐高松12万石を賜ります。御三家連枝各家の石高が3万石ほどであったことを考えると破格の待遇でした。後年、『史記』伯夷伝に影響を受け、兄の不遇を思い

やった光圀は、頼重の子綱策を養子に迎えて水戸家を継がせ、自らの長子頼常は兄の嫡子として高松藩を相続させています。

高松藩では將軍より賜った屋敷地(拝領屋敷)の周囲を、さらに借地や買上などによって拡張し(抱屋敷)、その規模は現在の庭園美術館及び自然教育園全域、さらには品川区上大崎2丁目あたりまでを包括する、総面積6万坪余りの広大なものであったようです。今日、藩邸時代の痕跡を見出すことは困難ですが、自然教育園内には「ひょうたん池」や「物語りの松」など回遊式庭園に由来すると思われる遺構があり、また美術館の庭園内にも「白金台の大榎」と呼ばれた古木が残されています。かつての藩邸内には高松の栗林公園を模して造園され、よく手入れの行き届いた名園があったのでしょう。

切絵図の中央を縦に走る通りが今日の目黒通りです。「松平讃岐守」と記された部分が高松藩下屋敷、現在のJR目黒駅は「堀出雲守」の屋敷地周辺(永峯町)にあたります。

(牟田/次回は第13号に掲載予定です) ◆



図3

図1「松平頼重像」松平公益会蔵 香川県歴史博物館撮影  
頼重が水戸家を相続していたら、光圀の編纂による「大日本史」や、世に言う「水戸黄門」の講談話は存在しなかったかもしれません。

図2 尾張屋版切絵図「目黒白金台」嘉永7年(1854)(株)人文社蔵  
\*図版は(株)人文社発行「目黒白金台」より転載。  
慶安4年(1651)に街道筋の開発が認められると、1-11丁目までに分けられた町割に沿って商人町屋が整備されていきました。

図3、ひょうたん池(自然教育園内)土地の形状などから判断して、藩邸時代には現在の目黒通りに面した台地上に主要な建物が築かれ、北側傾斜地付近には地形を活かした回遊式庭園が営まれていたものと推測されます。



図2

\*下屋敷……………大名が郊外に設ける別邸のこと。  
\*嫡子……………跡継ぎとなる子供のこと。

\*撮影協力:国立科学博物館付属自然教育園  
港区白金台5-21-5 Tel.03-3441-7176